



ボランティアコーチに対する知的障害者の評価に関する一考察：スポーツ場面の参与観察を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大山, 祐太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006335

ボランティアコーチに対する知的障害者の評価に関する一考察

— スポーツ場面の参与観察を通して —

大 山 祐 太

北海道教育大学岩見沢校 アダプテッドスポーツ研究室

A study on the evaluation of volunteer coaches by students with intellectual disabilities

— Through participant observation in sports coaching scene —

OYAMA Yuta

Department of Sport Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

概 要

本研究は、スポーツ指導をするボランティアと知的障害者との相互作用から、知的障害者がボランティアコーチをどのように評価しているかを明らかにし、より充実したスポーツ指導にむけた示唆を得ることを目的とした。参与観察の結果、①知的障害者はボランティアコーチそれぞれに個別の評価をおこなっており、その評価は改善することが可能であること、②年齢や性別、当該活動の経験年数よりも、集合時に前に立つ、人前で指示を出すなど、どれだけ中心的な人物と判断できるような行動を示したかが評価に影響を与えること、の2点が確認された。スポーツ指導の際、当事者にとって、指導者の肩書、経験年数・参加者との接触年数の多寡、年齢が直接的な不利益とならないことは、指導者不足が懸念される知的障害者スポーツにおいて、新たなボランティア層の開拓、ひいては活動の継続性、提供するサービスの向上につながるものと考えられる。

I 背景と目的

平成23年に「スポーツ基本法」が成立し、障害者スポーツの推進が基本理念に掲げられた。翌平成24年には「スポーツ基本計画」が策定され、年齢・性別・障害等を問わず、万人が各人の関心や

適性に応じてスポーツに取り組めるよう環境を整備する方針が打ち出された。今後、障害者にとってもスポーツが取り組みやすい活動となることが期待されるが、知的障害者のスポーツは、医学的リハビリテーションを起源とする身体障害者のスポーツに比べて、社会的認知や理解が歴史的にも

浅く、支援体制が不十分で選択肢が少ないなどの現状がある（能村，1998．渡部，2006）。

知的障害者は、肥満と知的障害を伴いやすい基礎疾患があることや食行動異常の問題、健康教育の困難性などから、健常者よりも肥満傾向にあることが報告されている（原ら，2001．浜口，2006．石倉・坂口，2009など）。また、余暇を友人と過ごすことが少ない傾向にあり（郷間ら，2007）、活動内容もテレビ鑑賞やゲームなどで過ごすことが多く、体を動かす機会に乏しい現状がある（高畑・武蔵，1997．中山，2000）。さらに、スポーツ・レクリエーション活動における知的障害者の活動群は非活動群よりも生活の質が高いという報告もある（金子・南條，2007）。これらのことから、知的障害者にとっては特に、肥満解消、余暇の活性という点でスポーツ参画の意義は大きいといえる。

近年は、地域のスポーツクラブや団体におけるボランティアの重要性が取りざたされており、我が国の代表的なスポーツ組織・団体の半数がボランティアを活用しているという（仲澤，2002）。知的障害者スポーツは、前述したような社会背景から、その活動展開はボランティアによって支えられてきており、服部（2002）や細谷・大庭（2009）が指摘するようにボランティアの確保、養成が課題となっている。

しかし、ボランティア参加者は一般市民の有志者であることが多いため、必ずしも全員がスポーツに造詣が深いとは言い切れない。スポーツ分野におけるボランティアに関しては、松尾（2002）の指摘するように、素人主義が過度に強調されるという問題があり、提供するサービス（スポーツ指導）の裏付けとして専門的な知識・技能をいかに保障してゆくかが大きな課題である。知的障害者の保護者は、スポーツ指導をするボランティアに感謝しながらも、その指導に少なからず専門性を期待する現状もある（大山ら，2011）。特に、ボランティアは知的障害者本人からどのように認識されており、またそれ故にどのように行動することが、より円滑なスポーツ指導につながるのか

ということは明らかにされていない。スポーツという活動自体は有意義な活動であるが、知的障害者本人が、ボランティアという必ずしも専門性を備えているとは言い難い対象から指導を受けることに不都合を生じさせていないのか、この点を検討する必要があると考える。

よって本研究は、「スポーツ指導をするボランティア（以下ボランティア）」と知的障害者との相互作用から、知的障害者がボランティアをどのように評価しているかを明らかにし、より充実したスポーツ指導にむけた示唆を得ることを目的とする。

Ⅱ 方法

1. 研究方法

本研究では、知的障害者がボランティアをどう認識しているかを把握するため、知的障害者に年間を通じてスポーツ活動を提供するボランティア団体である「スペシャルオリンピックス日本・青森（以下SON・青森）」の協力を得て、知的障害者とボランティアの相互作用場面を観察した。観察方法は、観察者がフィールドとの関わりをもちながらデータを収集する、参与観察法を採用した。

2007年9月から予備観察を実施し、データの収集は2008年1月～2009年9月までの期間、SON・青森での活動場面41回を観察した。具体的な場面としてはアルペンスキープログラム14回、バスケットボールプログラム13回、陸上競技プログラム6回、フットサル体験プログラム5回、食事会2回、レクリエーション1回である。スポーツ活動は全て1回の活動時間は2時間前後であり、トレーニング開始までの準備時間や、休憩時間、終了後の後片付けや雑談の時間における相互作用についても観察の対象とした。

2. 方法の採択理由

参与観察法を用いた理由としては、予備観察やボランティア陣・保護者などの情報から、質問紙調査やインタビュー調査では、言語能力から鑑み

て複雑な問いに対しては意見を十分に表現しきれない対象が存在したことが挙げられる。また、面識のない人物が観察した場合、少なからず視線を意識してしまったり、見られていることで緊張してしまったり、普段とは違った様子を見せる可能性が高い対象も存在した。しかし、筆者は日頃当該活動にボランティアとして参加しているため、行為者としても観察者としても、フィールドにすることが違和感を生じさせるものではなく、むしろ、普段のようにスポーツ指導を行わずに、観察に徹している方が、周囲からの注意を引いてしまうと考えられた。よって、普段のありのままの様子を観察するため、参与観察を採用した。

3. 観察の対象と視点

観察は、主に知的障害者とボランティアの相互作用場面についておこなった。観察及び記述の基本的視点として、相互作用場面を可能な限り詳細にノートに記録することに留意した。その際、知的障害者へのスポーツ指導、スポーツプログラムの進行を最優先し、ノートへの記録はプログラム終了後に行った。また、電子機器類を設置した場合、観察対象に緊張感を与えることや、興味を引きスポーツ指導を阻害することに繋がるのが予想されたため、ビデオカメラやICレコーダーなどの機器は用いなかった。

今回対象としたのは知的障害者4名、ボランティア5名(表1)、ボランティアの役割分担は図1の通りである。役職としては、各競技プログラムのリーダーと、ボランティア全体を管理統括するリーダー・副リーダーがおり、それぞれ必要に応じて補助を設けている。スポーツプログラム担当が自身がリーダーを務める各競技プログラムを運営し、ボランティア管理のメンバーが体験プログラムや各種交流イベント等を担当している。

4. 分析

分析は、観察から得られた知的障害者と学生ボランティアとの相互作用場面の記述から、特徴的なエピソードを抽出し、それぞれに解釈や検討を

表1 観察対象

知的障害者				
A	13歳	男	4年目	軽度知的障害, ダウン症
B	13歳	男	2年目	軽度知的障害
C	27歳	男	6年目	中度知的障害, ダウン症
D	13歳	男	2年目	軽度知的障害

ボランティアコーチ				
ⓍE	19歳	女	1年目	アルペンスキーリーダー補助
ⓍF	21歳	男	3年目	ボランティア副リーダー
ⓍG	23歳	男	5年目	ボランティアリーダー
ⓍH	21歳	男	3年目	ボランティア副リーダー
ⓍI	21歳	男	3年目	アルペンスキーリーダー

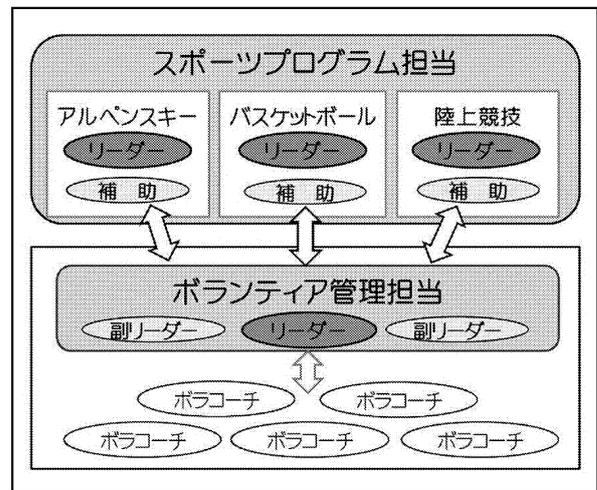


図1 SON・青森のボランティアコーチの役割分担

行うという手続きを踏んだ。観察対象の行動で確認が必要と思われるものについては、保護者や他のボランティアに対して聞き取りを行った。また、データの妥当性を確保するため、参与観察の際、誘導的になってしまわないように通常通りスポーツ指導をするよう努めた。

5. 倫理的配慮

観察は、SON・青森、該当するスポーツプログラムの責任者、当事者・保護者に対して、プライバシーの厳守及び研究の趣旨、フィールドノートの作成、結果の公開について説明し、許可を得ておこなった。

Ⅲ 結果と考察

1. ボランティアに対する個別評価

特徴的なエピソードを抽出し、それぞれに解釈や検討を行った結果、スポーツプログラム中の知的障害者とボランティアとの相互作用のなかで、知的障害者が、指示を出した相手によって接し方や態度を変えているという場面が観察できた。具体的には以下のような場面である。

エピソード①においてAは、再三にわたる⑤Eの指示には従わなかったのに対し、⑤Fからの指示にはすぐに従った。ここには明らかな違いが生じている。なぜAは⑤Eの指示に従わず、⑤Fの指示には従ったのだろうか。これに関しては、まずAはそもそもチェストパスができないことや⑤Eの指示が理解できていなかったことなどが考えられる。しかし、エピソード①の前の回のバスケットボールプログラム(2008年5月25日)やエピソード①

【エピソード①】

バスケットボールプログラムの最中、ボランティアと向かい合っただのパス練習の場面。胸もとから押し出すようにパスをする「チェストパス」の練習である。

A：「かーめーは一めー波一。」と、両の手のひらで腰からボールを押し出すような形でボールをパス。相手まで届かずに、転がっている。

⑤E：「(笑いながら)ちょっと、みんなと違うじゃない。こうだよこう。」と手本を見せながらボールを返す。

A：「いくよ。かーめーは一めー波一。」と、先ほどと同様にパス。

⑤E：「今はこのパスの練習だよ。いい、いくよ。えい。」と、手本を見せながら返球。

A：「んふふ。かーめーは一めー波一。」ボールが狙いの⑤Eよりもかなり右に外れ、隣でパスをしているペアのところへと転がる。

⑤E：「ほら、周りのみんなにも迷惑かけちゃうよ。ちゃんとやろうね。」

と、少し強めに注意するがCはやめない。結局、チェストパスは10往復×2セットであったが、1セット目は1度もチェストパスをしなかった。2セット目の1本目のパスでも修正がみられなかった。

⑤F：「A、できることはちゃんとやろや。ええか。」

注意を受けたAは下を向きうつむいたが、それ以降は逸脱することなく練習に参加した。

《2008年6月1日》

ド①以降もチェストパスができていたことが確認できている。また、Aは言語でのコミュニケーションにおいては若干の吃音がある程度で、理解については大きな困難はないこと、またAの筋力・技量を考慮してパスの距離も無理のない範囲で設定されていたことなどから、能力的なこととは別の要因が考えられた。保護者によると、「最近お気に入りのアニメキャラクターの影響を受けている」ということであったが、Aがその素振りをトレーニング中に見せたのはこのエピソード①のプログラムのみであった。これからは、Aの中でのボランティアへ対する意識の違い、つまり、そのボランティアが指示に従うべき対象なのかどうかというような、ボランティアへの個別評価が存在していることが推測できる。

また、エピソード②では、ボランティアに対する評価の差が生じていることを、知的障害者本人の言動から解釈できる。自分にアルペンスキーの指導をするボランティアに対してBが明らかに不満をもっており、割り当てられたボランティアではなく、⑤Gと一緒に滑りたいと⑤G本人に打ち明けている。同様に、ボランティアに対する評価に優劣が確認できる例として以下の2例を挙げる。

【エピソード②】

アルペンスキープログラム。練習開始前、室内の待機場所でBと⑤Gが話をしている。

⑤G：「よう、B。今日の調子はどうよ？」

B：「うん。いい。」

⑤G：「お前、気合い入ってんのか？元気ねーじゃん。どした？」

B：「だって今日⑤Gさんじゃないって言ってたよ。」

⑤G：「ん？ああ、一緒に滑るやつね。俺もBとも滑りたいけど、仕方ないさ。」

B：「〇〇さん(この日一緒に練習するボランティア)おもしろくないから。⑤Gさんがよかった。」

⑤G：「ご指名嬉しいけど、〇〇さんに失礼だな。〇〇さんスキーうまいし、また一緒に滑る機会あるからさ、頑張れ。」

B：「…はあ…(ため息)。」

《2008年1月27日》

エピソード③では、Cは二人のボランティアから同じようなニュアンスのことを言われているが、⑦Eには反抗的に接し、⑦Gに対しては親和的な対応であった。また、このエピソードに限らず、⑦Gに対しては「さすが」や「やっぱり」という言葉を用いる場面が多く、他のボランティアと比べても優れているという認識がうかがえた。

エピソード④からは、Dは⑦Hと同じチームではないと知り、「⑦Hがいないと負ける」と述べ

ており、⑦Hの技量を高く評価していることがわかる。しかし、⑦Hはフットサルやサッカーの経験がまったくなく、むしろ⑦H自身は苦手意識をもっていた。また、⑦Hは他のスポーツプログラムを通じて、Dに直接的に指導をした経験はなく、⑦H自身もDとの接触経験の記憶はほとんどなかった。にもかかわらず、Dは⑦Hが「他のボランティアよりも上手である」と認識していた。これらのことから、知的障害者は、ボランティアを一括りで捉えるのではなく、ボランティアによって評価と接し方を変えていることが考えられる。

また、エピソード③では、⑦Eに対して反抗的な態度をとっていたCであるが、エピソード⑤では⑦Eの指示通りに行動している。さらにエピソード⑥のように、Cが自ら⑦Eのもとへ向かい、会話をしたり身体接触を求めるなどコミュニケーションをはかる場面も確認された。これらのエピソードからは、ボランティアに対する評価は普遍的なものではなく、親和的・肯定的に変化しうる可変性あるものだとわかる。

【エピソード③】

バスケットボールプログラム。Cがフットワーク中に座り込んでいる。⑦EはCのサポートではないが近くにいたので声をかけた。

⑦E：「Cさん、疲れたんですか？」

C：「うーるせ、あっちいけ。」

⑦E：「・・・大丈夫ですか？」

C：「うーるせこの。」

⑦G：「Cさんちょっと疲れただけですよ？」

C：（無言でうなずく）

⑦G：「ちょっと休んだらまた練習しますよね。」

C：「そそそ。やっぱりコーチは違うな。」

《2008年6月8日》

【エピソード④】

フットサルプログラム、試合形式の練習のためのチーム分けの場面。

D：「⑦Hさんは僕のチームですか？」

⑦G：「いや、⑦Hさんは今回敵チームだよ。」

D：「どうしてですか？」

⑦G：「今回はたまたまね。」

D：「嫌だ、⑦Hさんいないと負けます。」

⑦G：「そうかな？Dのチーム強いよ。一番うまい経験者いるんだし。それにいつも思い通りのチームにはならないよ。」

試合が始まると、Dはドリブルしたまま会場の外へと出てしまった。注意をし、練習を再開するが、Dはボールを受け取るとまた外へと出ていった。Dに理由を尋ねると

D：「⑦Hさんいないと負ける、負けるの嫌です。」と答えた

《2009年3月14日》

【エピソード⑤】

アルペンスキープログラム。⑦Eがボランティアと知的障害者のグループ分けを発表する。⑦EとCは同じグループになっている。

⑦E：「今から名前を呼ばれる人は、会長のところに集まってください。では・・・（2人呼ぶ）、次、Cさん。」

C：「おす。」（指定された場所に移動する）

《参加者全員の名前を呼び終わる》

⑦E：「はい、それでは各グループ練習を始めてください。」⑦Eも自分の担当するグループのところへ移動。Cはスキー置き場にスキーを取りに行くと、Cのグループの場所とは違うグループの場所に移動。

⑦E：「Cさん、こっちですよ。」

C：「（本来のグループの場所へ戻り）ああ、こっちだったか。おーねさん（お姉さん）、そうだった。」

⑦E：「（笑いながら）うっかりですね。」

C：「んーそそそ。まーちがった。」

《2009年2月8日》

【エピソード⑥】

アルペンスキープログラム終了後、Cが、ホールでピブスをたたんでいる⑦Eのもとへ向かう。

C：「お、おーねさんは、〇〇〇※知ってる？」（※聞き取れず）

⑦E：「え？なんですか（笑）。すみません、もう一度言ってもらえますか。」

C：「だからー、『え〇〇※』。知ってる？」（※聞き取れず）

⑦E：「…すみません、ちょっとわからないですね。」

C：「僕は一、いつも一、見てる（笑顔）。おねさんも見ればいいじゃん」と握手を求めるように右手を出す。

⑦E：「あ、テレビですか？わかりました。」と手を握る。

C：「ふふ（笑う）」 5秒ほど握った手を上下に揺らす。

※保護者に確認しバラエティ番組のことと推定

《2009年2月15日》

2. 個別評価の規定要因

次に、ボランティアは具体的にどういった条件・要素をもとに評価されているのか確認したい。先のCと⑦Eの例では、スポーツプログラムの基本方針として、なるべく同性対応となるようにしているのので、トレーニング中に男性である⑦Eと女性であるCが直接的に接する機会はなく、⑦Eに尋ねてみても、親密度が高くなったという認識はなかった。しかし、エピソード⑤では、⑦Eはリーダー補助として参加者全体を指揮して活動することができ、Cをはじめとする知的障害者たちの誘導も可能であった。⑦Eは当該活動への参加歴が短く、調査対象となった他のボランティアよりも低年齢であったことから、単純に年齢や性別、参加年数から、指示に従うかどうかを決めているとは考えにくい。

エピソード③と⑤の違いとして、エピソード⑤においては⑦Eに「リーダー補助」という立場・肩書きがあったことが挙げられる。しかし、次のエピソード⑦からは、ボランティアの肩書きが、必ずしも指示を聞き入れるに足る条件であると言えないことがわかる。⑦Iは立場としては、プロ

グラムのリーダーであったが、エピソード⑦においては、Cは⑦Iの指示には追従しなかったが、エピソード⑤ではリーダー補助である⑦Eの指示通りに行動していた。アルペンスキープログラムを通して、リーダーである⑦Iよりも補助係である⑦Eの方を重んじていると思われたので、プログラムの休憩時間にCに「スキーのリーダーは誰でしょう？」と尋ねたところ、⑦Eを指差した。また、このような「リーダーの認識のずれ」は同様に、Dのエピソード⑧からも確認できた。

【エピソード⑦】

アルペンスキープログラム。リーダーの⑦IがCへ直接指導している場面。

⑦I：「Cさん、今のも良かったんですけど、もっとからだを前に向けてみましょう。」

C：「・・・（無言）・・・。」

⑦I：「ちょっと後傾になってたので、もう少しからだをこう（手本にやって見せる）。」

C：「わーかってるよ！」

⑦I：「ですよ。すみません。」

C：「ま、まったくー。」

その後も、⑦Iの声掛けに対しては顔をそむけている。

《2009年2月1日》

【エピソード⑧】

アルペンスキープログラム。この日の練習が終了し、知的障害者もボランティアも入り混じり、各々ゲレンデから室内へと移動している。Dは練習中着用しているピブスを脱ぎ、近くを歩いていた⑦Gへ放るよう渡す。

D：「ん。」

⑦G：「おーいD、ん、じゃないっしょ？」

D：「ありがとうございました。」

⑦G：「いえ、こちらこそ。じゃなくて、俺に渡すんでなくてちゃんとリーダーに返しておいでや。」

D：「はい。」

Dは⑦Eにピブスを手渡した。

《2009年2月15日》

エピソード⑧では、Dは⑦Gから、リーダーにピブスを返却するように注意を受けたが、ピブスを返却しに向かったのは⑦Iではなく、⑦Eのも

とであった。Cのケースと同様にDに「アルペンのリーダーって誰かわかる？」と確認したところ、「㉖Eさん」と回答していた。

大橋（1962）は、リーダーシップは状況に応じて発揮が必要となる状態であるため、常に同じ人物・状況に存在するわけではないと述べている。また、リーダーシップは、権威や職階のある人物が必ずしも発揮するわけではないこと（Selznick, 1957）や、フォロワー（本研究においては知的障害者と主任コーチ以外のボランティヤ）の中で認識されて初めて存在するとことなどが報告されている（薄羽, 2006）。リーダーである㉖Iは、㉖Eに経験を積ませるため、集団を誘導したり声掛けをしたりするような役回りはほとんど任せており、スキー場との練習場所や利用料金についての打ち合わせ、保護者への事務連絡、㉖Eへの指示などを担っていた。一方で㉖Eは、2009年のアルペンスキープログラム開催中は一貫して、リーダー補助ながらも練習の区切りごとに全体に指示をしたり、積極的に準備体操の進行をしたりと、「全体の前に出る機会」が㉖Iよりも多かった。そのことが、CやDに「指示に従うべき対象」と認識させ、結果として実際のリーダーよりもリーダーシップを発揮していったのではないだろうか。同様にエピソード①においても、㉖Gは全てのスポーツプログラムを通じて参加者全体に指示をしたり、事務連絡をしたりする機会が多かったことから、バスケットプログラム時はまだ役職についていなかった㉖Eと比べ、Aにとっては指示通りに行動すべき存在であると認識したと考えられる。

ちなみに、アルペンスキープログラムにおいて他のボランティヤや保護者に、リーダーは誰であるか尋ねたところ、全員の認識に全くずれがなく、アルペンスキープログラムにおけるリーダーは㉖Iであるという回答が得られた。実際、ボランティヤや保護者は、当該活動に関連する書類の提出や質問事項・相談事をもちかける際の対象は㉖Iであった。保護者やボランティヤにとっては、リーダーという立場にあることが、当該活動において

諸々の決定権をもち、運営にあたっての中心的存在であるという認識に直接的に結びついている。アルペンスキープログラムに関連する各種案内には、発行責任者としてリーダー㉖Iと明記されており、第1回目のプログラム開催日には「今年度アルペンスキーリーダーを務めさせていただきます、㉖Iです。よろしくお願ひいたします。」と、挨拶もしており、㉖Iがリーダーであると認識されているのは至極当然のことに思われる。しかし、知的障害者にとっては、「指示に従うべき人物」「場において権限を持つ人物」とであるという認識に至るのには、リーダーという役職にあるかどうかとは別の要因が関係している可能性が考えられた。

エピソード⑨においてCは、㉖Gに遅刻した旨をリーダーに報告するよう指示されるが、下線部1のように、㉖Gが状況を把握していれば問題はないという見解を述べ、リーダーには報告しないままである。ここでは、㉖Gがバスケットボールのリーダーであるという、エピソード⑦のようなリーダー認識におけるずれが生じているのではなく、㉖Gがリーダーではないことを承知の上で、それでも㉖Gに報告した以上問題はないと、いわ

【エピソード⑨】

バスケットボールプログラム。Cが15分遅刻して参加。フットワークが終わり、休憩時間になるとCが㉖Gのところに歩み寄る。

C：「おーにさん（お兄さん）、ちーこくしてごめんね。」

㉖G：「そういうときもありますよ、気にしないでください。」

C：（うなづく）

㉖G：「ヘッドコーチにちゃんと言いましたか？」

C：「今、おーにさんに、しゃべったはんで（しゃべったから）。」

㉖G：「はい。でも、そういうことはちゃんとリーダーに言わないと。」

C：「おーにさん（お兄さん）が、わかってれば大丈夫だってば。」 1

Cは、この後もリーダーのもとに報告に行かなかった。

《2009年6月29日》

ば⑤Gを「特別視」していることがうかがえる。

また、エピソード⑩の下線部2で、ゲームセンターを貸し切りたいBは、組織の名前を出しても貸し切りはできないとわかり、次なる手段として「⑤Gの力」を挙げている。このことから、⑤Gに対して「何らかの権限を持つ人物である」と認識していることが推察される。また、下線部3の発言は、「⑤Gでだめならさらに後押しとして⑤Fや⑤Hを増やす」というニュアンスである。⑤Gに次いで、⑤Fと⑤Hに対しても、何らかの権限がある人物であると認識していることが考えられる。

このような⑤G、⑤F、⑤Hに対する特別視は、前述した集団の前に立つ頻度が関係していると考え

えられる。⑤G、⑤F、⑤Hは、スポーツプログラムにおける役職には就いていないものの、ボランティア全体を統括する役割を担っており、プログラム後に参加者達の前に出て事務連絡をしたり、ボランティア達に指示をする機会も多い。また、スポーツプログラム以外のレクリエーションなどの企画・運営もこの3人が中心となって進めている。観察対象となったA～Dは当該活動に頻繁に参加しており、⑤Gらが全体の前でマイクを持って話をしたり、ボランティアを多く集めて指示を出したりと、中心的に動いている姿を数多く目の当たりにしている。そのことから、⑤Gらに関しては優位性があると認識していることが伺える。

【エピソード⑩】

バスケットボールプログラム。Bと⑤Gとの休憩時間のやり取り。

B：「ねえねえ⑤Gさん。」

⑤G：「ん？」

B：「プログラム終わったらみんなでゲームセンター行きたいですね。」

⑤G：「いいね、プリクラとか撮りたいな。」

B：「SO みんなで行けばいいじゃない。」

⑤G：「全員だと難しいべ。それぞれ予定あるだろうし、まずこの人数入らないし。」

B：「SO で貸し切れればいいじゃない。」

⑤G：「いや、残念ながらウチの組織にそんな力も金もないから。」

B：「SO ですって言えばいいよ。」

⑤G：「SO とか青森じゃまだ知られてないんだよね。だからどんだけ偉そうに言っても『え、どちら様ですか』で終わっちゃうわ。」

B：「じゃあ⑤Gさんが直接予約すればいいかもよ。」²

⑤G：「いやいやいや、俺個人じゃさらに意味ないから。余裕で断られるから。」

B：「⑤Gさんでだめなら⑤Fさんと一緒に行けばいいかもよ。⑤Hさんとか。」³

⑤G：「あいつらを増やしても同じさ。ま、今度一緒に行こうぜ。」

B：「行こう行こう。」

《2009年6月29日》

Ⅳ まとめ

今回の観察からは、①知的障害者はボランティアそれぞれに個別の評価をおこなっており、その評価は改善することが可能であること、②年齢や性別、当該活動の経験年数よりも、そのフィールドにおいてどれだけ中心的な人物であるような行動を示したかどうかが、より評価に大きな影響を与えうること、の2点が示唆された。

スポーツにおいては、バスケットボールなどのチーム競技はもちろん、個人競技でも準備体操時や開始・終了の挨拶時など、ある程度の集団行動が求められる場面があり、そもそもスポーツは事故や怪我の危険性がついてまわる活動である。安全で質の高いスポーツ指導をするためには、指導者には集団や個人を上手く統率する力が求められる。知的障害者のボランティアに対する評価は個別におこなわれており、可変性はあるがボランティア間において優劣がつけられるものであった。このことから、スポーツ指導の際、知的障害者のボランティアに対する評価は、ボランティア本人の行動次第で良くも悪くもなりえることがうかがえた。

知的障害者のスポーツ活動において、ボランティアが選手たちを統率し指示を与える際、「リーダー」や「責任者」といった名目としての役職が

あることよりも、いかに「リーダーらしく振る舞うか」という挙動が重要な要素となることが示唆された。「リーダーらしい振る舞い」というのは、具体的に、集団に対して指示を与えたり、大勢の前で話をしたりといった「姿を見せる」ことである。知的障害者から指示に従うべき対象であると認識されるには、ボランティヤ個人の年齢や性別、活動経験年数といった属性よりも、見せる行動の質（リーダーらしい行動）と頻度が大きく影響していると考えられた。

様々な組織や団体、諸活動において中心的な役割を担うには、ある程度の活動実績が求められる場合が多いので、必然的に参加年数や接触時間が付随してくるであろう。そこからすれば、知的障害者がボランティヤに対して個別評価するに、間接的には経験年数や年齢が影響してくるもいえる。しかし、知的障害者が納得し、指示に沿って行動できる要素として、「ボランティヤの挙動」が大きな影響力をもつとすれば、知的障害者スポーツにおける経験年数や、当該参加者との接触年数が少ない人物であっても、十分に指導者としての役割を果たし得る。経験のない者が指導者となることの是非については議論しなければならないが、今回の結果は新たなボランティヤ層開拓に資する知見をつなげることではないだろうか。

川添（2007）は、非営利組織におけるリーダーは、リーダーシップを発揮しつつフォロワーシップも兼ねているという面をもち、状況との適合性から組織の成員の誰もがリーダーとなりえることを報告している。また、非営利組織において生じるリーダーシップはリーダーとフォロワーという役割分担的な考え方からくるのではなく、相互作用的なものであって、そのことはフォロワーの職務上のプレッシャーの軽減やフォロワーの自立を促しうるなどの利点があると述べている。つまり、時にリーダーとして全体をまとめ上げ、時には一構成員としてリーダーシップを発揮している者に追従するという、役割の変化が生じうるのである。役職としてのリーダーではないメンバーがリーダーシップを発揮するという状況は、指示系統の

乱れにつながる可能性もあり、その背景にはリーダーの怠慢や集団の統率がとれていないという事態が生じているのかもしれない。しかし、状況に応じて誰しもある程度集団をコントロールできることは、臨機応変な対処が求められる知的障害者のスポーツ指導場面において、十分に利点となりえるものと考えられる。

指導者不足は知的障害者のスポーツ参加阻害要因として指摘されており（望月, 2007. 藤田, 2013）、一部の経験豊富なボランティヤのみが活躍できる状態では、活動そのものの停滞が懸念される。知的障害者に対するスポーツ指導の経験年数や当該参加者との接触年数が少ない人物であっても、組織の一員として適切に役割を果たすことが可能であれば、学生をはじめとする新たなボランティヤ層の開拓、指導者の充足とつながっていく可能性がうかがえる。

V 今後の課題

最後に、本研究の限界について整理する。本研究では、知的障害者のスポーツ場面におけるボランティヤとの相互作用場面を観察し、発せられた言葉だけではなく、動きや表情の変化等も加味し、一連のエピソードについて分析した。ボランティヤは、ゆっくり話す、簡単な言葉で端的に用件を伝える、柔和な表情で接するなど、指導対象に応じて言葉選びや態度等を変化させていた。これは言語力に課題があり、情緒的な起伏が激しい傾向にある知的障害者に対してだからこそ生じた事象であると考えられるため、今回得られた結果が、他の障害者のスポーツ場面においても同様の説明力をもつとは言い切れない。

また、ボランティヤの拡充を図ることは活動の継続性という点から必要不可欠なことであるが、冒頭で述べたようにいかに専門性を保証するかという課題も孕む。今回の結果を一つの情報として加味しながら、ボランティヤの継続参加を促す仕掛けやボランティヤトレーニングの方策などについても検討してゆく必要がある。

謝 辞

本研究にご協力いただいたスペシャルオリンピックス日本・青森の皆様へ深く感謝申し上げます。

参考文献

- 藤田紀昭 (2013) : 障害者スポーツの環境と可能性, 創文企画, 東京, 第4章「障害者スポーツの個人的側面へのアプローチ—全国障害者スポーツ大会参加者の実態—」120-148.
- 郷間英世・藤川聡・所久雄 (2007) : 知的障害者の余暇活動についての調査研究—通所授産施設に就労している人を中心に—, 奈良教育大学紀要, 56(1) : 67-70.
- 原美智子・江川久美子・中下富子・山西哲郎・下田真紀 (2001) : 知的障害児と肥満 発達障害研究, 23(1), 3-12.
- 浜口弘 (2006) : 知的障害児(者)の肥満の治療と支援, 小児看護, 29(6) : 719-724.
- 服部伸一 (2002) : 知的障害児と地域生活—余暇活動への支援を中心に—, 余暇学研究, 5 : 66-73.
- 細谷一博・大庭重治 (2009) : 知的障害児・者を対象とした余暇支援事業におけるボランティアの役割, 上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要, 15 : 11-14.
- 石倉健二・坂口愛 (2009) : 知的障害等のある児童生徒の肥満と行動特徴の関連についての検討—ある特別支援学校での調査を通して—, 兵庫教育大学研究紀要, 35 : 59-63.
- 金子勝司・南條正人 (2007) : 知的障害児(者)のスポーツレクリエーション活動と生活の質(QOL)に関する研究—性別による活動群と非活動群からの比較検討—, 共栄学園短期大学研究紀要, 23 : 111-125.
- 河添博幸 (2007) : 非営利組織におけるリーダーシップ—類型的研究に関する一考察—, 熊本大学社会文化研究, 5 : 77-94.
- 松尾哲矢 (2002) : スポーツ・ボランティアとその専門性—【ボランティア—専門職】指導者システムの再構築—. 体育の科学, 52(4) : 270-276.
- 望月浩一郎 (2007) : 日本の障害者スポーツと法をめぐる現状と課題, 身体教育医学研究, 8(1) : 1-11.
- 中山考之 (2000) : 知的障害児の余暇と地域生活—余暇の実態調査より—, 情緒障害教育研究紀要, 19 : 239-246.
- 仲澤眞 (2002) : スポーツ・ボランティア活用の現状と課題, 体育の科学, 52(4) : 266-269.

- 能村藤一 (1998) : 知的障害者スポーツの現状と課題, 臨床スポーツ医学, 15(2) : 149-153.
- 大橋幸 (1962) : リーダーシップ. 青井和夫・綿貫譲治・大橋幸 : 集団・組織・リーダーシップ, 培風館 : 301-439.
- 大山祐太・増田貴人・安藤房治 (2011) : 知的障害者のスポーツ活動における大学生ボランティアに対する保護者の意識 弘前大学教育学部紀要, 106 : 23-30.
- Selznick, P. (1957) : Leadership in Administration, Harper & Row Public. (北野利信訳, 組織とリーダーシップ, ダイアモンド社, 1963.)
- 高畑庄蔵・武蔵博文 (1997) : 知的障害者の食生活、運動・スポーツ等の現状についての調査研究—本人・保護者のニーズの分析による地域生活支援のあり方—, 発達障害研究, 19(3) : 235-244.
- 薄羽哲哉 (2006) : リーダーシップ—フォロワーから見たリーダーシップ—, 横浜国際社会学研究, 10(6) : 135-156.

(岩見沢校講師)